

令和 2 年 9 月 3 日現在

機関番号：34603

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2019

課題番号：16K03208

研究課題名(和文)「満洲国」期における満鉄の輸送と地域変容

研究課題名(英文) A study the relationships between the South Manchuria Railway's transports and regional variation in the Manchukuo times

研究代表者

三木 理史 (MIKI, Masafumi)

奈良大学・文学部・教授

研究者番号：60239209

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は南満洲鉄道(以下、満鉄)の本業である鉄道事業について、特に1932年の満洲国成立後を対象に研究を行った。貨物輸送では農産物と鉱産物、旅客輸送では華北からの漢人労働者輸送について解明した。その結果、農産物輸送において大豆に変わり得る品目の不在、鉱産物輸送における大連-奉天間の輸送輻輳について新知見を加えることができた。さらに漢人労働者輸送においては日本人移民や旅行者を大きく上回る輸送量であったことを明らかにすることができた。さらに教育機関の分布から都市近郊輸送を解明し、さらに並行運河計画と大連-奉天間の輸送輻輳の関係を考察した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

満鉄は非常に重厚な研究成果をもつ国策会社と信じられてきた。しかし、実際には岡部牧夫の「満鉄は鉄道の運営を第一の事業としていたにもかかわらず、戦後はそれに関する本格的な研究が極端に少ない」(岡部編『南満洲鉄道会社の研究』日本経済評論社、2008年、400頁)のような指摘があり、特急「あじあ」神話が独歩してきた。本研究は、そうした偏った、あるいは誤った満鉄像の修正に寄与することが期待できる。

研究成果の概要(英文)： This study has been clarified the railway sector in the South Manchuria Railway from the founding of Manchukuo in 1932 to 1945. The researcher has focus attention on agricultural products and mineral resources, and Chinese migrant laborers from the Northern China in passengers. As a result this study has been able to introduce new aspects for few cereal crops could have been substituted for decline of soy beans by decreasing of exports, freight transports had continued to get centered on the S.M.R. Company lines, especially sections between Darien and Fengtian. Although Japanese population had increased, their travelers had been about 20-30% of their population in peak times. Japanese passengers had been far inferior to Chinese because of the numerous differences of Japanese population and Chinese migrant workers.

研究分野：歴史地理学

キーワード：南満洲鉄道 満洲国期 農産物 鉱産物 漢人労働者 都市近郊輸送 運河計画 鉄道事業

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

本研究は、平成 25 年度から着手した「南満洲鉄道の輸送に関する歴史地理学的研究」の枠組みを継承し、1931 年の満洲事変後の「満洲国」成立に伴う満鉄改組を経て終戦に至る輸送の推移に関わる 3 つの課題を明らかにしようとした(図 1)。その課題とは、[課題 Na] 大豆などの農産物、[課題 Nb] 石炭などの鉱産物、[課題 Nc] 漢人労働者を中心とした旅客、の 3 つの輸送の解明で、1920 年代までとの比較を行いながら、植民地空間の変化に伴う輸送内容の変容に言及した。それによって満鉄の鉄道輸送研究の通時的完成を期すことが可能になると考えた。

2. 研究の目的

本研究は、1930 年代以後の満鉄輸送の動向について検証した。特にそれまでの関東州 + 満鉄附属地の空間的に限定された植民地利権から「満洲国」という空間支配に変化したこと、旧中国(中華民国)系資本および旧ロシア系などの鉄道が「満洲国有鉄道」(以下、国線)として編入されたことを踏まえて、前述の 3 本柱を図 1 のように再編成した。そして前述の 3 つの課題の各々について空間的変化と多様化を明らかにしようとした。さらに特論的テーマとして都市近郊輸送と並行運河計画による貨物輸送の水運転移を加えて補完することにした。

3. 研究の方法

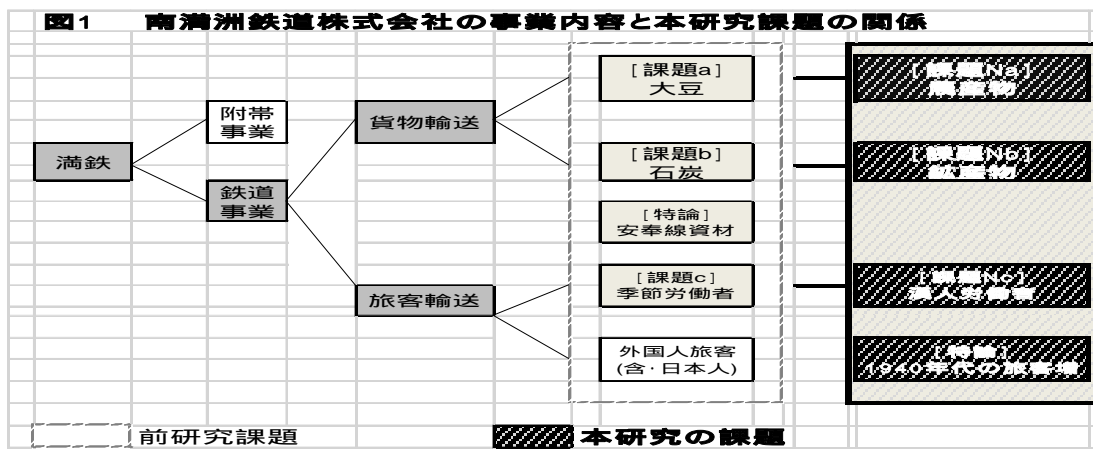
本研究は単独研究で、まず平成 28 年度に [課題 Na] 農産物輸送に取り組み、輸出品の大宗とされた大豆の輸出減少の原因を究明すると同時に、「満洲国」域における農産物生産の地域的変化に着目し、生産拠点が満鉄社線沿線から北満全域へと拡大してゆく過程を追究した。また農産物生産の品目が大豆中心から、玉蜀黍、高粱、小麦へと多様化してゆく過程に注目した。

ついで平成 29 年度は [課題 Nb] 鉱産物輸送に重点を置いて取り組み、満鉄改組によって満洲の鉱工業生産を担いつつ広域化を推進した満炭関係の資料を北海道大学附属図書館、一橋大学経済研究所などで収集した。

平成 30 年度は [課題 Nc] 漢人労働者輸送に重点を置き、「満洲国」成立当初の漢人入殖の禁止政策を国立国会図書館やアジア経済研究所図書館資料を活用して明らかにしたうえで、1940 年代に満鉄の旅客収入が急増した要因の解明にも配意した。

これら各年度の資料調査および論文作成の一方で、平成 29 年度を除き、中華人民共和国で現地調査を進めたが、最も期待していた档案馆はもとより、図書館さえも十分な利用が許されず、結局現地踏査に重点を置いた調査しか行えなかった点が心残りである。

平成 31 年度から新規課題に移行したが、特論的テーマに関わる 2 本の論文の執筆を行った。



4. 研究成果

(1) 農産物輸送に関する研究 満洲国成立に伴う満鉄輸送の変化を、日本の空間支配拡大と経営委託された国線の関係から農産物輸送から検証した。満鉄社線と国線の輸送量には大きな差があったが、満鉄は国線改良と社線の連絡強化を進めた。そして貨物輸送の内容は次第に多様化した。しかし特産物の太宗である大豆の輸出減退を代替できる作物がなく、小麦や高粱は局地的流通に限定されたため、多くの国線で線内輸送量の伸長にとどまることになったことを明らかにすることができた。

(2) 鉱産物輸送に関する研究 五箇年計画と満鉄貨物輸送の関係を1937～40年度を中心に石炭業と鉄鋼・化学工業の分布に注目して考察した。五箇年計画前後の満洲国工業の分布は、1934年度の～の4つの地方型が40年度の'～'型に再編され、鉱業分布の南満への偏在傾向が継続した。そのため貨物輸送は、社線、特に連京線の輸送肥大を招き、五箇年計画によって工業が分散しても地域格差を伴ったため輸送集中区間の大勢に変化がなかった。また満洲国内に広く分布した満炭鉱は、産出炭の輸出用途が限定的で、地場消費中心であったために広域的な輸送需要を生まなかった。その結果空間支配の拡大による貨物輸送の大勢は、五箇年計画に伴う鉱工業品輸送においてもほとんど変化しなかったことを明らかにした。

(3) 漢人労働者輸送に関する研究 満洲国期の旅客輸送の比重の高まりを、漢人劳工と日本人旅行者を手がかりに、旅客輸送における漢人利用の実態、日本人利用の増加と満洲国期の旅客輸送の実態、1930年代末からの遊覧客に代わる増加旅客の実態、について考察した。漢人劳工輸送は、満洲国期の入満制限によって減少し、五箇年計画時の労働力需要の高まりによって再び増加した。その後定着者増加によって漢人利用者は1940年度をピークに減少へと転じた。他方在満日本人人口は増加したが、ピーク時の日本人旅行者数は日本人人口の20～30%程度にとどまった。しかし人数規模の差によって漢人劳工に相当する巨大な人流とはならなかった。1930年代後半から戦争に伴う軍隊移動やそれに付随した公務利用が増加したことを明らかにした。

(4) 都市近郊輸送に関する研究 満洲における都市近郊輸送と動車との関係を手がかりに、満鉄の小単位旅客輸送の成立を検討した。満鉄の都市近郊輸送は当初附属地の小学校通学生向けに萌芽し、満洲国成立後に列車通学の割合は南満で教育機関の密度を高めたため減少した。他方補助的小学校相当施設を設置した北満の鉄道通学者は増加しなかった。動車輸送は1930年から運行区間100km前後を上限に主に社線区間で進み、1920年代まで混合貨物列車の担った通学輸送の客貨分離を推進した。しかし満鉄の動車は車両の運用効率向上につながり、頻発運転を要する区間が限られ、燃料など消耗品価格の低減効果の大きかったことが明らかになった。

(5) 並行運河計画による貨物輸送の水運転移に関する研究 遼河水系における水陸間の輸送競合・補完関係を考察した。1930年代の水運輸送量は大幅に減少し、下航する特産物中心に鉄道利用の不便な下流域で細々と存続したに過ぎなかった。つぎに五箇年計画や日中戦争開戦によって連京線輸送量が増大し、遼河水系に再び注目が集まった。満洲国成立後に日本が運河計画を立案できるようになると、奉天商工会議所が連京線の輸送力補完を提唱した。その後満洲国交通部は鉄道と水運の補完関係にもとづき運河を計画し、連京線の貨物輸送の緩和を意図するようになったことが明らかになった。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計9件（うち査読付論文 4件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 3件）

| | |
|--|-------------------------|
| 1. 著者名 三木理史 | 4. 巻 70 |
| 2. 論文標題 書評：荒山正彦『近代日本の旅行案内書図録』 | 5. 発行年 2018年 |
| 3. 雑誌名 人文地理 | 6. 最初と最後の頁 512 - 513 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.4200/iihiz.70.04_512 | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である） | 国際共著 - |
| 1. 著者名 三木理史 | 4. 巻 53 |
| 2. 論文標題 書評：老川慶喜『小林一三 都市型第三次産業の先駆的創造者』 | 5. 発行年 2018年 |
| 3. 雑誌名 経営史学 | 6. 最初と最後の頁 72-75 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |
| 1. 著者名 三木理史 | 4. 巻 60 |
| 2. 論文標題 書評：湯澤規子『胃袋の近代 食と人びとの日常史』 | 5. 発行年 2018年 |
| 3. 雑誌名 歴史地理学 | 6. 最初と最後の頁 20-23 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |
| 1. 著者名 三木理史 | 4. 巻 69 |
| 2. 論文標題 「満洲国」期の鉱工業と満鉄の貨物輸送 | 5. 発行年 2019年 |
| 3. 雑誌名 地方史研究 | 6. 最初と最後の頁 印刷中 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|---|--------------------------|
| 1. 著者名 三木理史 | 4. 巻 61 |
| 2. 論文標題 「裏日本」論と東北論再考 海からみた近代東北地方の港湾と鉄道 | 5. 発行年 2019年 |
| 3. 雑誌名 歴史地理学 | 6. 最初と最後の頁 51-66(印刷中) |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|--|-----------------------|
| 1. 著者名 三木理史 | 4. 巻 なし |
| 2. 論文標題 満洲鉱業移民構想の成立と挫折 北票炭鉱と鶴岡炭鉱の事例から | 5. 発行年 2018年 |
| 3. 雑誌名 今西一・飯塚一幸編『帝国日本の移動と動員』 | 6. 最初と最後の頁 145-175 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|---|--------------------|
| 1. 著者名 三木理史 | 4. 巻 58-3 |
| 2. 論文標題 「満洲国」期の農産物鉄道輸送 満鉄の路線拡大との関わりに注目して | 5. 発行年 2016年 |
| 3. 雑誌名 歴史地理学 | 6. 最初と最後の頁 1-23 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である) | 国際共著 - |

| | |
|---|-------------------------|
| 1. 著者名 三木理史 | 4. 巻 89-5 |
| 2. 論文標題 1920年代南満洲鉄道の旅客輸送 漢人出稼者輸送との関係を中心に | 5. 発行年 2016年 |
| 3. 雑誌名 地理学評論 | 6. 最初と最後の頁 234 - 251 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である) | 国際共著 - |

| | |
|--|---------------------|
| 1. 著者名 三木理史 | 4. 巻 34 |
| 2. 論文標題 満鉄安奉線改築工事とその資材輸送 | 5. 発行年 2016年 |
| 3. 雑誌名 鉄道史学 | 6. 最初と最後の頁 15-32 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

〔学会発表〕 計4件 (うち招待講演 1件 / うち国際学会 0件)

| |
|-----------------------------|
| 1. 発表者名 三木理史 |
| 2. 発表標題 「満洲国」期における満鉄旅客輸送 |
| 3. 学会等名 社会経済史学会第87回全国大会 |
| 4. 発表年 2018年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 三木理史 |
| 2. 発表標題 「裏日本」論と東北論再考 海からみた近代東北地方の港湾と鉄道 |
| 3. 学会等名 第61回歴史地理学会大会 (招待講演) |
| 4. 発表年 2018年 |

| |
|------------------------------|
| 1. 発表者名 三木理史 |
| 2. 発表標題 「満洲国」期の鉱工業と満鉄貨物輸送 |
| 3. 学会等名 第25回日本植民地研究会全国大会 |
| 4. 発表年 2017年 |

| |
|---------------------------------------|
| 1. 発表者名 三木理史 |
| 2. 発表標題 「満洲国」期の農産物鉄道輸送 空間支配の変化に関して |
| 3. 学会等名 第59回歴史地理学会大会 |
| 4. 発表年 2016年 |

〔図書〕 計2件

| | |
|------------------------------|-----------------|
| 1. 著者名 木村圭司・稲垣稜・三木理史・池田安隆 | 4. 発行年 2019年 |
| 2. 出版社 ナカニシヤ出版 | 5. 総ページ数 90 |
| 3. 書名 自然と人間 奈良盆地に生きる | |

| | |
|------------------------|-----------------|
| 1. 著者名 愛知県史編さん室 | 4. 発行年 2019年 |
| 2. 出版社 愛知県 | 5. 総ページ数 823 |
| 3. 書名 愛知県史 通史編8 近代3 | |

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

| | | | |
|---------|---------------------------|-----------------------|----|
| 6. 研究組織 | 氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号) | 所属研究機関・部局・職 (機関番号) | 備考 |
|---------|---------------------------|-----------------------|----|